

「共につむぐ“知の拠点”をめざして」

—信州大学附属図書館と県立長野図書館の職員交流研修報告—

朝 倉 久 美 （県立長野図書館）

畔 上 友 里 （県立長野図書館）

1. はじめに：本研修の経緯

信州大学附属図書館と県立長野図書館は、長野県内の学術・文化の発展に資することを目的として「信州大学附属図書館と県立長野図書館の連携に関する覚書」（以下、覚書）を2015年8月21日に締結している。本研修は、この覚書の「職員の研修・相互交流に関すること」を根拠に実施され、2017年1月の初回以来、今回で2回目を数える。

日程の都合上、県立長野図書館（以下、当館）から信州大学附属図書館への職員派遣は前半と後半で年度をまたぎ、前半が2019年3月7～8日の2日間、後半が2019年5月14～15日の2日間、計4日間の日程で開催された。当館からの派遣職員は、企画協力課 朝倉、資料情報課 資料係 畔上の2名である。朝倉は学校図書館勤務が長く当館の赴任1年目、畔上は新規採用の初年度であり、いずれも公共図書館での勤務を始めて間もない。よりフラットな立場で、良いと思うものを素直に吸収できればと思い、この研修に臨んだ。

本稿では、研修の中でもメインプログラムとして設計された部分を中心に報告と考察を行う。加えて、研修の実施順とは逆となっていることをあらかじめご承知いただきたい。

2. ひとと情報をつなぐ図書館活用教育

交流研修の内容は、双方の職員による相手館での業務体験である。信州大学附属図書館の研修においては、大学収蔵コレクションや機関リポジトリといった蓄積資料の紹介、医学部図書館の見学、電子ジャーナルや目録作成など、研究機関ならではの専門的な業務を概観ないし体験できるプログラムが組み立てられており、より広義で「図書館」の機能を捉えられるよう設計されていた。（図1）



図1 信州大学附属図書館収蔵品

公共図書館との違いを最も意識させられたのが、新入生向けの利用者教育にかかわる図書館ガイダンス（以下、ガイダンス）および学習支援サービス「ピアサポ@Lib」に代表される学習支援である。

信州大学附属図書館中央図書館（以下、信大中央図書館）では、全学部の新入生全員を対象に、およそ2ヶ月間にわたり40回ほどのガイダンスを実施している。全図書館職員の協力体制のもとで運営が行われるよう、プログラムの標準化が図られており、大学初年度における情報活用教育が重要な業務のひとつに位置づけられていることがわかる。

対して、公共図書館ではこのような特定の時期に集中して講座を行うことは困難である。その理由として、大学図書館と公立図書館の性質の違いについて整理しておきたい。

第1に挙げられるのは、利用者の範囲である。大学図書館の利用者は多くは学内の利用者に限定される（固定的）のに対し、公共図書館では利用者が不特定多数（流動的）である。第2に、利用目的である。大学図書館では、大学での学修を主目的とした利用であるため、ニーズがはっきりしている。しかし、公共図書館では各々の利用者が個々のテーマを持っており、利用の目的は当然ながら不揃いになる。第3に、デジタル情報源に対する意識の差である。日常的に調査・研究に携わる大学関係者は、電子ジャーナルや機関リポジトリのみならず、インターネット上に公開されている情報源を取り入れることに対して能動的である。一方の公共図書館では、そもそもデータベースの認知度が低く、利用への抵抗感も根強い。当館でも15件のデータベースを整備しているが、職員がレファレンスの際に利用するケースを除き、新聞記事を除く利用者主体でのデジタル情報活用はあまり進んでいない。

図書館の持つ情報資産の活用を促しつつ、すべての学生を図書館や図書館職員とつなぐ、いわば《顔が見える》ガイダンスに関わることで、公共図書館における利用者支援の弱さが浮き彫りになった。同時に、大学での研究を進めるためにはデジタル情報源の利活用が前提条件となっていることを実感した。ここで、学生（利用者）ひとりひとりの“知りたい”“学びたい”欲求により深く寄り添う学習支援プログラムである「ピアサポ@Lib」について述べる。

大学における学生への学習支援は、2010年代の大学図書館を取り巻く政策の柱のひとつとして注目されてきた。2010年12月、文部科学省 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－」では、大学図書館に求められる機能・役割として、以下の4つを挙げている。

1. 学習支援及び教育活動への直接の関与
2. 研究活動に即した支援と知の生産への貢献
3. コレクション構築と適切なナビゲーション
4. 他機関・地域等との連携及び国際対応

着目すべきは、学習支援への関与が一番に示されている点である。「学生が自ら学ぶ学習」の支援が求められる中で、ラーニング・コモンズの整備やレファレンスサービス、学習支援は「要請に応える方策」と評価し、推奨している。こうした背景の中で、信大中央図書館でも“学生の居場所”を増やすことを目的とし、「閲覧学習室の拡大」「会話・飲食可能なスペースの設置」「グループ学習室の整備」を中心とした改装工事を2013年から2015年にかけて行っている。

交流研修期間中にも、上記のスペース内で学生が自習する姿や、飲食可のコーナーで対話をしながら学びあう姿が見られた。

また、同審議会まとめでは、“学生の自学自習”を支援するためには、院生や学部の上級生が下級生を指導する体制を組織化することも効果があると提起している。ラーニング・コモンズとは、「主として学生を対象とし、あらゆる学生支援のための設備・施設、人的サービス、資料をワンストップで提供する学習支援空間」であり（呑海・溝上 2011）これまで図書館が行ってきた資料提供に加え、空間と人材の面で支援を行うことが求められている。

信大中央図書館が実施している「ピアサポ@Lib」は、“ラーニングアドバイザー”と“ライティングアドバイザー”を二本柱とした、大学初年度生の学習を支援する仕組みである。信州大学は県内各地に複数のキャンパスを持つ学部分散型の大学であるが、初年次は全学生が松本キャンパスで過ごす。「初年次生が滞りなく2年次に進級するための支援」が顕在化したニーズとして認識されている中で、松本キャンパスの敷地内にある信大中央図書館が学内の各部署と連携し、学習支援の中核を担うことの意味は大きい。

ラーニングアドバイザーは、学習の行き詰まりを感じた新入生の相談役となる、院生や学部の上級生による支援チームである。数学や化学などの理系の基礎科目が中心となるが、語学や文献の探し方、PCの操作についても相談に乗る。ライティングアドバイザーは、一年生向けの共通教育科目「大学生基礎力ゼミ」と連携し、同科目の受講生に向けた指導を行う。また、別枠として年4回の「レポートの書き方講座」も開催しており、上記の科目を受講していない学生に向けた支援も広く行っている。担当する学生は、前年度の科目の受講者の中から教員による推薦を受けた優秀者であり、学生同士で学びの継承と循環が生まれるシステムとなっている。どちらの活動も、指導者となる学生に対する研修や、相談・回答の内容を記録しており、質の高い指導が行われるようなバックアップ体制が整っている。交流研修期間中にも、図書館内の専用スペースには多くの学生が相談に訪れ、試験期間以外においても恒常的にピアサポが活用されている様子が見られた。

これらの情報リテラシーに関する利用者教育と学習支援に関わる活動は、大学図書館という場ならではの直接的な需要であり、知の拠点としての図書館が能動的に仕掛けられるサービスであると考えられる。とはいえ、それは公共図書館においても本質的には変わらない。近年の情報環境の急速な変化から見ても、利用者が自ら進んで必要な情報を取得できる場を提供し、学びを深めるために必要な支援を行って然るべきである。

社会生活において、高度な情報活用スキルを身につける機会はそう多くない。誰もが利用できる公共図書館だからこそ、様々な立場からのニーズを見越して、あらゆる情報の扱い方について学ぶ場や機会を提供する意味がある。利用者全員に対する「利用教育」が困難であるからこそ、同じニーズを持つ利用者同士をゆるやかにつなぎ、互いの知識や技能を提供しあう場を設定できないだろうか。図書館がそういった機関であることを一般に周知し、恒常的に機能させていくことが、これからの公共図書館に求められる役割であろう。

3. 館とひとをつなぐ「信州・知の連携フォーラム」

「誰のための図書館か」に立ち返ったとき、館種による業務内容の違いに意味づけがされる。しかし、勤務館と研修先の比較や発見ばかりに目を奪われていては、新たに得た知識を実際の職場で導入できるか否かという方法論に陥ってしまう。今回の研修のメインプログラムである「信州 知の連携フォーラム」は、別々の機能を持つ機関がそれぞれの特性を活かし、目的を共有して協働の形を探るための意図的な仕掛けのひとつである。2019年度は信州大学附属図書館が主導となって企画が進められたことで、フォーラムの日程に合わせる形で前半の研修日程が生まれ、研修員もスタッフ兼参加者として運営に加わった。(図2)

「信州 知の連携フォーラム」(以下、フォーラム)は、MLA連携 (Museum, Library, Archive) をベースとし、「長野県における知と学びに関わる各種機関が、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策について、議論する」枠組みとして2016年に発足したものである(森ほか2019)。長野県内における知的情報資源のデジタル化推進および人材育成を主な目的に掲げ、長野県信濃美術館、長野県立歴史館、信州大学附属図書館、県立長野図書館の4館が核となり、継続的に対話の機会を設けながら開催を重ねてきた。



図2 信州 知の連携フォーラム

2019年3月8日に開催された第3回フォーラムは『寺社のMLAを体験する～地域の文化資産を見て・知って・整理して・発信する～』と題され、参加者が実際に目録の作成に取り組むワークショップ形式が取られた。寺社の宝物蔵で保存していた古書から書誌情報を拾い出し、目録作成の概要を学ぶ。合わせて古典籍データベース等を検索し、同定作業を行うことで、蓄積された情報が共有されていく過程を体感する。自ら整えた目録情報が共有財産として受け継がれていく過程を実感するとともに、参加者の中に“創造・発信”を行う当事者意識が育つ様子を垣間見ることができた。また、題名・筆者・年代・内容など「何を拾い出せばいいか」を考えることは、「何を残したいか」「確かな情報とは何か」を見つめなおすことにもつながっていく。

フォーラムの翌日にはオプションとして、実際に諏訪市の佛法紹隆寺にある宝物庫へ足を運び、寺の境内において目録を作成するという企画も組まれた。現物を所蔵している蔵を見学しながら講義を受け、その時代の空気に触れることで“過去を紐解き、未来を垣間見る”ことのできる絶好の機会となった。参加者は図書館員のほか、学芸員、研究者、学校教員などに加え、寺の檀家の方を含めた一般参加者も少なくない。様々な立場の人々が、知識と経験をすり合わせながら達成感を共有することで、“みんなでやる”ことの意味を確かめられたのではないかと。記録を成果として残せば、自分の実践が将来的に誰かの学びにつながるというイメージを持つことができる。いわば、時代の足跡を刻む「実感のある知」の体得機会でもあった。

「共につむぐ “知の拠点” をめざして」—信州大学附属図書館と県立長野図書館の職員交流研修報告—

信州大学附属図書館が中核となって運営した第3回フォーラムを機に、今後は関係機関によるリレー方式で展開していくことになっている。第4回フォーラムは県立長野図書館での開催が決定しており、このたびの交流研修での関わりは、次回のフォーラム運営を見越したのものである。

県立長野図書館では2020年1月現在、蔵書管理システムの更新と合わせて「信州・知のポータル」(仮)の構築を進めている。書誌検索の結果に限らず、長野県が管理運営するデジタルアーカイブ「信州デジくら」やウェブ上にある様々な情報を表示し、あらたな情報の切り口を提示することで、利用者の主体的な活用を促すものである。このポータルを題材として、長野県の情報資産を育てて未来へつなぐにはどうしたらよいか、自分なら何ができるか、様々な人々が多様な視点で語り合える場を設定できればと考えている。

日々のいとなみの中から、人と人との触発的な学びは生まれる。そこで生まれたものを情報源としてすくい上げ、形を整えて保存し、利用可能な状態を提供する構造を保ち続けることが、MLA連携の根本ではないだろうか。情報を必要とし、使うのは人である。それは関連機関の職員であり、一般利用者であり、これからの未来を担う子どもたちでもある。「館」が「場」となることで、地域資源を育てていく土壌は豊かなものとなるに違いない。

4. 結び目をつくる図書館へ

4日間の研修を通して、信州大学附属図書館で行われている業務を一通り体験するとともに、実際にスタッフとして運営に参加する機会もいただけた。試させてもらう、教えてもらうだけではない研修プログラムは、より深い理解に結びつくと同時に、先方からの研修生を受け入れる際にも役立った。もちろん、それぞれの館における業務は多岐にわたっており、新たな知識技能を短期間で習得できるわけではない。お互いの図書館に対する認識が、あくまでも表層的な部分にとどまっていることは否めない。しかし、図書館としての本質的な機能を再確認するとともに、自分たちの日常業務を見直し、何を持ち帰るか、受け入れた研修生にいかにか持ち帰ってもらえるかを考える機会を与えてもらったことに、大きな喜びを感じた。それらのプロセスにこそ、交流研修の大きな意義があると思う。

県立長野図書館は現在「情報と情報を、情報と人を、人と人をつなぐ」をコンセプトとした運営を行っている。“知”はどこで生まれ、形づくられるのか。どこを拠点として、誰に継承され、どのように育っていくのか。図書館の来し方行く末を見据えながら、実験のような実践を重ねている。信州大学附属図書館での研修最終日には、県立長野図書館の取り組みを紹介する時間が設けられ、多くの職員の方にお集まりいただいた。質疑応答は長時間にわたり、担当業務を言葉にすることの難しさと向き合った。県内一館だけの県立長野図書館ができることには限りがある。そういった意味においても、この研修が一回限りのものとならず、継続的な開催が実現できたことの功績は大きい。「知の連携フォーラム」とともに、このような交流機会を重ねていくことで、図書館同士が互いを知り、価値を認め合い、引き立て合うことができる。

また、今回の研修員として業務体験をさせてもらう側に立った我々が、今度はつなぐ側に立ち、伝える役目を担うという覚悟も生まれた。これからどのように組織や人々と交わり、関係性を深めていくか。情報のプラットフォームであり続けていくために、どのような土台と材料が必要か。それらを常に考えながら問いかけ続けることが、着任して間もない職員のできることであり、研修生として派遣されたことの意味にほかならない。社会と共につむぐ「知の拠点」を目指し、その結び目となる意識を持ちながら、今後の図書館業務に臨むつもりである。

最後に、このたびの研修において意図的な研修プログラムを設計し、磐石の受け入れ態勢を整えてくださった信州大学附属図書館の皆様へ、心からの感謝の意を表したい。

参考文献

- 小澤多美子 (2018) 「信州大学附属図書館における職員交流研修報告：公共図書館員が見た大学図書館」『信州大学附属図書館研究』Vol. 7, p. 231-236.
- 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会 (2010) 「大学図書館の整備について (審議のまとめ) - 変革する大学にあって求められる大学図書館像 -」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm
(参照 2019-12-2)
- 濱田祐次 (2018) 「附属図書館セミナー『大学図書館の学習空間と学修支援 - 世界・日本・信州の事例から -』開催報告」『信州大学附属図書館研究』Vol. 7, p. 225-230.
- 呑海沙織、溝上智恵子 (2011) 「大学図書館における学習支援空間の変化：北米の学修図書館からラーニング・コモンズへ」『図書館界』Vol. 63 (1), p. 2-13.
- 加藤善子、森いづみ、後閑壮登、武田敦巳、勝木明夫、高野嘉寿彦 (2019) 「学習支援における図書館の役割を考える - 学習支援プログラムの統合を通して -」『信州大学附属図書館研究』Vol. 8, p. 175-185.
- 森いづみ、小島浩子、武田佳代、滝口智子、湯本寛深、後閑壮登、鈴木映梨香、羽生将昭、伊東洋輔、吉澤明莉、渡邊匡一 (2019) 「『信州 知の連携フォーラム』におけるMLA連携の試み：長野県内の図書館・美術館・歴史館の取組」『大学図書館研究』Vol. 112, p. 2041- (1-14) .
- 森いづみ、岩波峰子 (2018) 「拡がりゆく人材育成ネットワーク：信州大学附属図書館と県立長野図書館の連携から (特集 大学図書館と公共図書館の連携)」『図書館雑誌』Vol. 112 (11), p. 734-736.